

国際交流レポート

日本とポーランドとチェコ

都市情報学部都市情報学科 3年

110781027

鈴木 瑛

目次

I 概要	1
II 動機	1
III ポーランド編	1
IV チェコ編	7
V まとめ	8

I 概要

ポーランドへの国際交流は7月30日から7月10までのものとなり、そのうち最後の3日間は自分でホテルや交通機関のチケットをとって別の場所、自分の場合はチェコの首都プラハに滞在する計画を立て、それに基づいて行動するというものであった。また、引率の稲葉先生によるワルシャワ大学日本語学科の生徒達との交流及びポーランド国内での案内を現地学生にして頂いた

II 動機

小さい頃から親につられて海外と一緒に旅行に行くことが多く、日本以外の文化に触れることにとても興味を持っていた。また、高校とは違う大学という社会人の一歩を踏み出す舞台で時間のある今だからこそ、ただ単に外国の地を踏んで見るだけではなく、会話をしてコミュニケーションをとるチャンスだから参加した。

また、海外にはよく英語ができないとつまらない、なにかあった時には喋れないと対処できないという人を多く見るが、今の自分の完璧とは言いがたい、むしろ喋れないと言っても過言ではない英語力でどれだけ海外で過ごせるか試してみたいというのも理由の一つである。

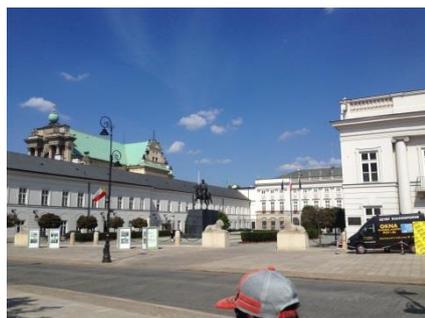
III ポーランド編

7月30日ーワルシャワに到着したばかりでベルヴェデルスカ通りに面するワルシャワ大学のゲストハウス「ヘラホテル」の方に泊まった

7月31日ーワルシャワ大学の日本語学科の先生方との交流会のためにクラクフ通りのワルシャワ大学に訪問させて頂いた



左上がワルシャワ大学玄関、右が大学敷地内である。ワルシャワ大学は日本にあるいくつかの大学とは違い建造物が町の雰囲気にあわせた石造りのものであり、大学の歴史を伺わせる建築であった。そのせいなのか学科ごとの建造物の区切りが多く日本のように1つの建物に幾つもの部屋を作って区切る形式ではなかったので、また、部屋の壁にところ狭しと並べられた本があるせいなのか、少々部屋が狭く感じた。しかし、この環境は自分にとっての理想の大学に近く羨ましく思えた。



左上が大統領官邸であり1818年にショパンが人生で初めての演奏会を行った場所
右上が旧王宮



旧王宮内の1室だが流石王宮とのこともあって調度品は豪華である
なおこの旧王宮はたまに要人のパーティーがあるそうでこの日も一部の部屋には入れなかった。この王宮のすぐそばにはジグムント3世の碑が立っている





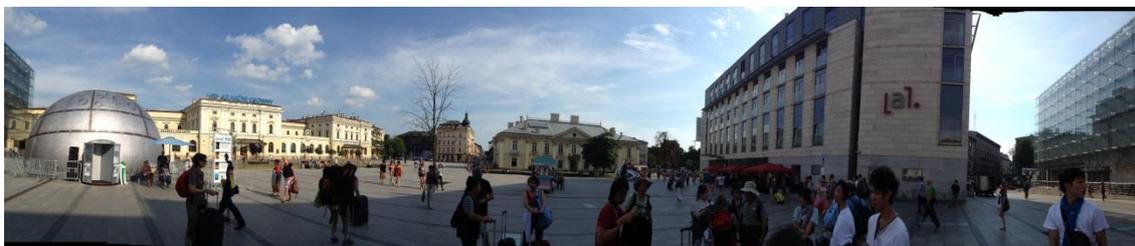
上から2枚目のパノラマ写真は帰国後調べたところカナレットの間という部屋であることがわかった。この部屋に収蔵されている絵画は第二次世界大戦後の街の復興の際に参考にされたそうである



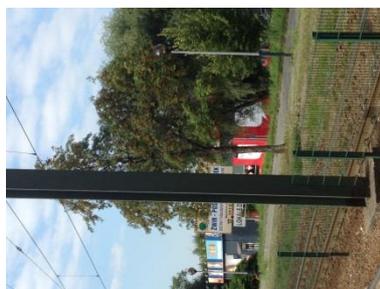
上の写真は旧王宮を中心とした旧市街の中心にある広場である。右側に写っているのは剣を振り上げて盾を構える人魚像。下の画像は中央を流れる川はヴィスワ川



8月1日一ワルシャワからクラクフまで電車で移動した
電車内は1車両の中に7つほど小部屋がありそのなかに椅子が6, 8個対面する形で並んでいた。乗り心地は日本の鉄道と比べると少々劣悪感はある(トイレとか)が、電車で移動してるという実感が湧くので楽しかった。



クラクフ駅の広場のパノラマ写真、左のドームは映画を上映しており、左奥に見えるのが旧クラクフ駅で現在はチケット販売センターになっている。



クラクフでの最初の食事はユダヤ料理だった、左の皿の手前から奥へミニピクルス、緑豆をペーストにしたもの、チーズ、トマトとちょっと香辛料が効いたもの、東欧風獅子唐ワルシャワに限らずクラクフも都市の中に緑が多い



8月2日一午前中はクラクフを自由行動で見て回り、左の教会はクラクフの中央広場に面する聖マリア教会で今回は非常に運がよく、12時を回ると塔上でクラクフの曲が演奏されるのを聞くことができた。右の写真は中央広場にある織物会館であり、中にはおみやげのお店がところ狭しと並んでいる

クラクフの町にはいたるところに教会が立ち並んでおり、それぞれ違う雰囲気を持ち合わせていた。

聖マリア教会は1222年に建てられたゴシック様式の建造物であるに対して、敷物会館はルネッサンス様式の建造物であるが、様式が違って町並みに対してうまく調和するように立てられているのには驚いた。



上の写真はクラクフの町の小高い丘に建てられているヴァヴェル城である。この中には右の写真の左側に写っているヴァヴェル大聖堂も含まれており、大聖堂では14世紀から18世紀までの約400年間ポーランド国王の戴冠式を執り行い国王の墓所ともなっている。



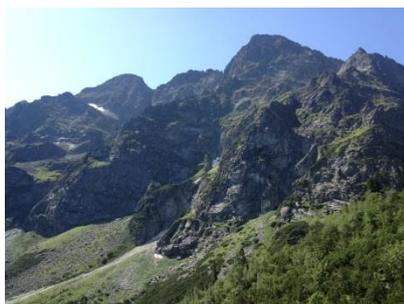
午後はヴィエリチカ岩塩坑を訪問、クラクフの南東15kmのところにある小さな町ヴィエリチカにある。採掘場には王の像、妖精の像、採掘工の像、コペルニクスの像など岩塩で作られた数々の彫像が並べられており、壁や天井には鍾乳石のように塩の結晶が溶け出して自然の美術作品ができています。またクラクフはチーズの露店販売がとても多く、且つ、いろいろな種類あるがどれを食べてもおいしかった



8月3日ーアウシュビッツ強制収容所を訪れた。今回は稲葉先生の取り計らいにより、日本人ガイドの中谷さんにガイドをしてもらったが同じ日本人なのにガイドでの伝わり方がものすごく重いものだった。日本のガイドだとあれはこうですというような既成事実を淡々というだけだが、中谷さんのガイドは毎回見学者の心にどう思うか問い掛けるようなガイドで、正直自分の中での見学中の思い出といえばその対してどう答えなければいけないか必死に考えていた自分がいたと思う。収容所を見て残酷だとか悲しいなという気持ちが起こるのは当然だが、その次のステップで、じゃあこの悲惨なことをこれから防ぐにはどうすればよいか？それは自分でできるのであろうか？人任せにしないだろうか？というもう一段階上の考えを生み出さなければならないと考えた収容所見学だった



8月4日ーザコパネに移動してモロスコイ・オコという場所でハイキングを満喫した。ザコパネは冬はスキーリゾートとして夏は避暑地として観光業が盛んであり、滞在中もいろいろな外国人に声をかけられた。ワルシャワやクラクフもポーランド国内は自然が豊かで自然と人口物の配分が絶妙だと思った。





上の湖は海の目と言われておりその名の通り目のように2つ湖がある

8月5日一スロバキア国境付近のコンドラトヴァ山を登った。右中央の山頂は国境線をたどっている

IVチェコ編

チェコは夜行列車で2日間使ったので実質1日しか見て回ることはできなかった。泊まったホテルは新市街近郊のソコルスカー通りの「ホテルシティークラブ」

今回はチェコの代表的な建造物を見ることができ、また、1日の間に文化を知るためには食文化と自分が決めていた目標の通り1日半で地元有名レストランや穴場レストランに7箇所行った。食文化的にポーランドとチェコはあまり違いはなかったが、ポーランドは比較的肉料理が多かったが、チェコは野菜類や根菜、粉物類が多いと感じた。

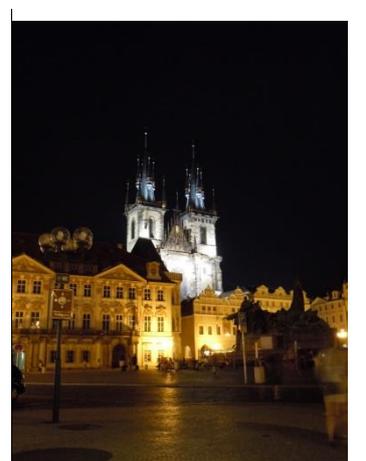
8月6日一ザコパネからクラクフまでバスで移動、夜行列車が発車するまでの半日はぶらぶらして過ごす、この時に特産の青い食器類をお土産に購入。



8月7日一主にプラハ城付近を見学した。プラハ城の塔の上から見るプラハ市街は絶景であり、その隣にある聖ヴィート大聖堂は10枚以上の巨大ステンドグラスが壁一面にはめられておりきれいだった。プラハ城のふもとの川にかかる橋はカレル橋と呼ばれており橋の淵にはキリスト教の聖者の彫像がずらりと並んでいる。カレル橋は近年までは自動車も通れるようになっていたが、歩行者のみの通行に変わった。プラハ旧市街の中央広場にはプラハ市民会館俗にスメタナホールと呼ばれている建築物が立っており、内装が宮殿の用に繊細で緻密に作られていた。また広場にはストリートパフォーマーが多くさすがプラハと感じた



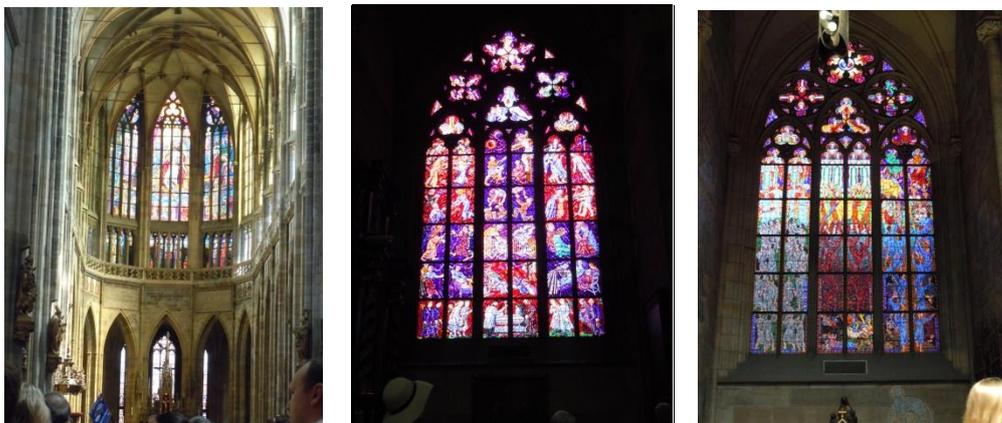
左から中央広場にそびえたつティーン聖母教会、旧市庁舎、国立博物館



左から火薬塔、ティーン聖母教会の夜景、中央広場のアーティスト



左からプラハ城の塔から見たカレル橋、カレル橋に立つ彫像やモニュメント

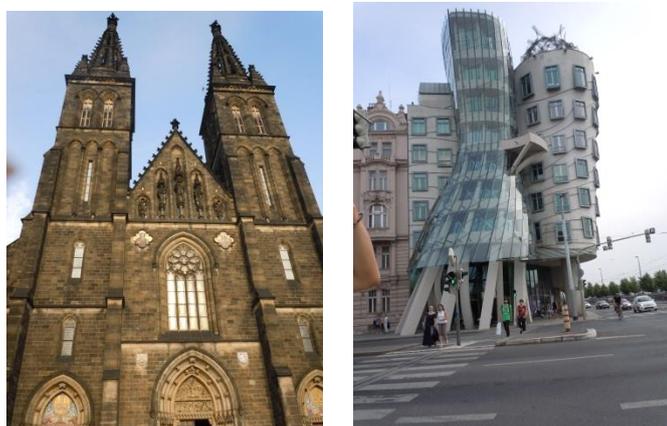


左から聖ヴィート大聖堂のステンドグラスの正面と側面。これ以外にも多くのステンドグラスがあったが非常に込み合っていたため奥まで進むことができなかった。

8月8日ーこの日は旧市街と新市街をまたぐ形で市内を見て回った。旧市街と新市街どちらも街の雰囲気に合わせて建築デザインがなされていた。この日はワルシャワへの夜行列車乗る



上の写真は国立博物館前の通りで歩行者天国風になっていた
日本では見られないオープンテラス型のレストランが多く見られた
下の写真は郊外のユダヤ教会とダンシングビル



8月9日ーワルシャワ中央駅を降りたのちバスで空港まで移動。予定では8月10日までだが日本との時差の関係上この日飛ぶと10日にセントレアにつくことになる

8月10日ー中部国際空港到着

Vまとめ

今回ポーランドとチェコに行ったがどちらも過ごしやすかった。また言語が通じないと何もできないかというところでも無く身振り手振りで説明すれば相手側はしっかりわかってくれていた。しかしそれは簡単なコミュニケーションをするときだけでしか通用せず、列車の予約のようなものは難しいのでどうしても英語が必要だと思った。その点、日本の学生とは違いポーランドの学生は母国語+英語は必修+必要な多言語ができていた。今後世界のグローバル化がますます進む中で世界各国の人たちとコミュニケーションを取るためには共通語である英語を喋れる事が必須だ。英語は自分で勉強することもできるがやはり海外の教育システムと同じように小さい頃から英語に慣れ親しまなければ付け焼刃程度の英語力になってしまう。日本の教育制度を根本的に変えなければならないと思った。